

アーク・ブラッド2

方舟都市の巫女

榊 一郎

Ichiro Sakaki

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 倉嶋丈康

目次

第一章 遠い人

9

第二章 残滓

102

第三章 角在る者達

168

あとがき

251

ARK/2

— MAIN CHARACTERS —

瑠璃色の、綺麗な宝飾品のような髪が特徴的な可愛い少女。流体制御の特能をもち、一番最初に明久と《女神》に乗り込んだ。

ルコット・9111・ガルバネイド

亜麻色の髪と妖精のような尖り耳をもち、念動力を操る。瞳の色は紺碧、時に真紅に変化。明久と朱乃の主治医でもある。

ベルレッタ・1394・ヴァンピール

鳶色の瞳の凜然とした印象の少女。耳と尻尾をもつ半獣系因子の発現者。明久が目覚めて初めて出会った人物。

ミス・4506・アンウェルフ





峰部明久（みねべ あきひさ）

西暦2036年に、妹の朱乃とともに事故に巻き込まれ人工冬眠した高校生。西暦5012年に目覚めると、地球上で唯一の『原種人類』の男性となっていた。

エリンシア・3333・スプリフォード

大きな琥珀色の双眸の、引っ込み思案な女の子。〈アーク〉でも稀少な有角族の娘。



アーティ・0008・ガオルグルフ

半獣系因子をもつ長身で伶俐な印象の美女。侵略体を迎撃している強化外装機官部隊の指揮官であり、明久が通う《学校》の教官でもある。



ニラ・1247・アルパノース

髪も肌も白く、瞳だけが赤いまるで雪のような人物。帰還生存率100%を誇る発掘部隊の隊長。アーティと並ぶ有名な強化外装機官使い。



アーク・ブラッド2

方舟都市の巫女

第一章 遠い人

部屋を見ると、その人の為人ひととなりが分かるという。

本棚ほんだなの巾たじは、その人の辿たどってきた思索しぎくの道程みちほどを象徴しょうちゆうするし、カーテンや家具にはその人の属する

家の価値観や経済状態が、小遣いこづかの範囲はんいで揃そろえられる小物には、その人の美的感性センスが、如実じよじつに顕あらわれる。

部屋は、その主あるじの分身ぶんしんのような部分を、少なからず持つ。

そんな話を——以前、峰部朱乃みねべあけのは、本で読んだ事があった。

「……………」

そこは自分の部屋ではなかった。

白い壁。白い床。白い天井。

カーテンも。シーツも。パイプベッドも。

何もかもが——白い。

まるで誰かの色に染まるのを拒むかのように。

入院患者用の個室。

清潔な——しかしそれだけの空間。

当初は息が詰まるような気分だったが……そんな

部屋の佇まいたたずまいにも、いつの間にか馴れてしまっていた。

あるいはそれは、部屋が自分の色に染まるのと

逆で、朱乃が部屋に染まってしまっただけなのかもしれない。

ひどく退屈たいくつな場所だった。

毎日が、概ね同じ事の繰り返しだ。

此処から飛び出して何処かに行きたいと、発作的

に思う事もしばしばあった。だが、身体からだの弱い自分

には無理だと分かっていたし、そんな事をしたら親

が心配すると分かる程度の分別は、幼い朱乃にもあ

った。

だから——あの日。

病室の扉を叩く音がした時も、朱乃は殊更に何かを期待していた訳ではなかった。

いつも通りの簡単な検査に、看護師が来たのだと思っていた。

しかし——

「朱乃——具合はどうだ？」

「……おとうさん？」

眼を丸くして、朱乃は訪問者を見つめた。

病室に入ってきたのは、父親だった。

ただ——父親だとは分かるが、何故か顔がよく見えない。

そればかりではなく、改めて窓の外に眼を向ければ、風景も輪郭があいまいで、細かい部分がよく分からない。まるで滲んだ水彩画のようだ。あれは山あれは雲、と形と色は辛うじて判別がつくが、全体的に、曖昧模糊とした、奥行きが無い景色がそこにあった。

(……ああ)

近付いてくる、顔の见えない父を見つめながら朱乃は想う。

(夢だから……だよ……)

そう。これは過去の出来事だ。

それを、改めて夢の中で回想しているに過ぎない。だから朱乃は、この後に何が起こるかという事も覚えていて。

それだけは——一部始終を、何年経っても、とても鮮明に思い出せる。

「……」

父が脇に退くと、病室の出入り口に一人の少年が立っているのが見えた。

年齢は朱乃とさして変わるまい。未だ『男』と呼ぶには躊躇われるような……幼い愛らしさを残した顔立ちに、緊張の色を浮かべている。勿論、これは回想している朱乃の感想であって、当時の彼女には彼の容姿を細かく評する余裕など無かったが。

「朱乃、この子は明久だ」

と父が言った。

「今日から、お前のお兄ちゃんだ」

「きょうから、おにいちやん……？」

兄や姉は先にいるもの。後から出来るのは弟や妹だと決まっている。

何かの間違まちがいだろうか、と当時の朱乃は思った。

しかし……

「はじめ、まして」

ぎこちない口調で男の子——明久はそう挨拶あいさつしてきた。

子供が子供にする挨拶ではない。

今にして思えば……兄は朱乃の病室に来るまでに、母や、他の親戚しんせきや、その他多くの大人おとな達に、同様の挨拶を繰り返してきたのだろう。兄にとっては、自分も、そんな大人達と大差無かったのだ——多分。気に入ってもらわねばならない。だから行儀良く振る舞わねばならない。

そんな風に、多分、父に言い含められて。

だが勿論……当時の朱乃は、兄や父の背後にあるそんな面倒な事情など知る筈はずも無く。

「おにいちやん……」

不思議は不思議として受け入れると、次にやってきたのは期待感だった。

朱乃の周りには大人しかない。

医師。看護師。母。そしてたまに——父。

母は優しいけれど、さすがに毎日は見舞いに来てくれない。

お医者さんや看護師さんは、人当たりは良くて、物腰やわも柔らかだけど、どこか醒さめた眼で朱乃を観察しているかのような感じがして——奇妙きみょうな距離感を感じる事があって、それが何となく怖こわかった。

幼い頃の朱乃は、身体が弱く学校も休みがちだった。だから同じ年頃の友達というものが一人もない。同世代の子供と遊んだ記憶が無い。朱乃にとってそれは、架空フイクシヨウの存在や、遥はるかかに遠い異国いこくと同じ

——本やテレビの中にしか見る事の出来ない、およそ現実味を欠いた概念だった。

「あの……おにい……ちゃん……？」

使い慣れない言葉を口にする、何か舌の上に違和感が残った。

「あつ……はい」

しかし戸惑っていたのは多分兄も同じで。

「じゃなくて——うん」

初めて会った『妹』を前にして、どういう接し方をすれば良いのか、よく分からない、といった様子だった。当たり前だ。むしろ事前に何の前振りもなく、いきなり連れてきて会わせるなど——父のやり方が強引に過ぎるのだ。

だがやはり、当時の朱乃はそんな事を考える余裕も無くて。

だから——『一緒に遊んでくれる？』と聞くのも急に恥ずかしくなった。

「……………」

思わず口をつぐんで俯く朱乃。

そういえば——ベッドの脇に小さな棚があった。

ふとそんな事を思い出すと、途端に、それが朱乃の視界に現れていた。

そこには絵本や、落書き帳とクレヨン、人形などがまとめて押し込まれている。いずれも高価そうな代物なのは、父親なりに朱乃に注いだ愛情の証なのだろう。だが一日中ベッドの上にいるせい、すぐに飽きて朱乃が興味を失ってしまう、というところまでは想像が及ばなかったらしい。

「……………」

もう少し男の子が興味を持ちそうな玩具が入っていれば……と朱乃は思う。それならば出来たばかりの兄に『遊んで欲しい』とねだる言葉も口にし易かったかもしれない。

どうすれば良いのだろう。

朱乃は誰かに甘える事にすら慣れていなかった。しかし……

「あつ……あけの、ちゃん」

ふと名を呼ばれて顔を上げると、いつの間にか、すぐ傍^{そば}に明久が立っていた。

彼は朱乃の視線^{しせん}を追って、棚の中身に眼を向け——それから、朱乃の方に向き直ると、少し恥^はずかしそうに、頬^ほを赤らめながらこう切り出した。

「何かして、遊ぶ？」

「……………」

一瞬^{いつしゅん}——驚きで、朱乃は言葉を発する事も出来なかった。

それは本当に、ただそれだけの他愛^{たわい}ない一言だったのだけだ。

「うん……」

あの瞬間からきつと朱乃にとって明久は『大好きなお兄ちゃん』になったのだろう。

そして——

……………

朱乃にとって明久が何者にも代え難い存在になる

のに、そう時間は必要無かった。

「だからブラコンだの何だの言われる訳だろ」
夢の中の時間は、飛ぶように過ぎる。

一五歳の——夏。

「別にいいもん」

学校の帰り道で交わされるいつものやり取り。

「良かないだろ」

「——本当の事だもん」

ちよつと拗^すねてみせるのも、いつもの事だ。

この話題になると、明久は困^{こま}ったような顔をする。兄に悪いとは思いつつも——困ったような顔をするという事は、明久も、決して悪い気はしていないのではないか、などと勝手に想像したりもする。だからついつい何度も兄を困らせてしまう朱乃だった。

勿論——分かっている。

朱乃と明久。

いつまでも、ただの仲良し兄妹ではいられない。日溜^{ひだ}まりの中に微睡^{まどろ}むかのような、安らぎに満ちた

日々は、いつか必ず終わる。終わらざるを得ない。
兄妹である限りは。

だが——だからこそ。

「お前な……」

「兄妹っていつても……半分だけだよ」

病める時も。健やかなる時も。

喜びの時も。悲しみの時も。

富める時も。貧しき時も。

いつも互いを支え、助け、慰め、ずっと一緒にいられるようにと願うならば、むしろ自分達は兄妹であつてはならない——

「~~~~~ッ！」

不意に割り込んできた叫び声が、朱乃の思考を中断させる。

（ああ——）

突如として風景が揺れる。

まるで何かの映像を見ているかのように——現実感が急速に失われていく。

亀裂の如く走る閃光。

叩き付けられる轟音。

慣れ親しんだ日常は悉く崩壊し、回想はそこで中断を余儀なくされる。

停止する時間。暗転する世界。

そこから先は……何も無かった。



裂帛の気合が迸る。

怒号のような激しさで、少女達の唇から放たれるそれを——峰部明久はむしろ心地良いとすら思った。誰かが真剣に頑張る姿は見ていて気持ちが良い。それが身も蓋もない殴り合い……即ち実戦格闘技の訓練場面であつたとしてもだ。

そこは機動要塞都市〈アーク〉内に設けられた、訓練施設の一つだった。

この時代、西暦五千年代にもなお残る教育制度

——即ち『学校』では、実技実践に重点を置いた授業内容が多い。単純な知識は睡眠学習で詰め込める為、それらを実際に活用する為の習熟に重きが置かれているのである。

人類が置かれている状況が過酷である事もあり、学校で教える内容については、極限状況下の生存技術や戦闘技術に偏りがちで——今、明久の目の前行われているのもその一つなのだった。

施設の広さは——二一世紀に生まれた明久の知識の内から、近い印象の言葉を用いるなら、おおよそ講堂や音楽堂程度。格闘技の道場、あるいはリングとしてはかなり広めの印象である。

床には表面形状から硬さまで自由に設定・調整出来る素材が敷き詰められており、投げ飛ばされてもあまり怪我はしないように配慮されている。ただしそれは完全な平面にはなっておらず、あちらこちらに凹凸が取えて設けられていた。

恐らくは実戦的な状況を再現する為だ。実際の戦

闘において、完全な平面の上で闘う事の方が少ないという判断なのだろう。

そして——その真ん中。

そこで二人の少女が互いに向き合い、簡素な防具を着けて、闘っている。

「——ッ！」

「~~~~ッ！」

少女達は、綺麗に体に沿った——明久の時代の知識になぞらえるなら、レオタードのような衣装に身を包んでいた。

強化外装機官に乗る時の接続服と比べれば、体を覆う布の面積は広いのだが……白い肩や、引き締まった身体の線が露わになっているおかげで、どうしても、見てはいけないうるものを見ているかのような気分になってしまう。

格闘技訓練に使うには無防備に過ぎるようにも見えるが、動きやすさと通気性を優先させるとこいういうデザインになるらしい。着用者を護る為の

『仕掛』^{システム}は別にあるから、こうなっているのだそうだと。ここまでは両者——というかこの場にいる生徒全員に共通だ。

ただし——

「普通こういう場合って、同じ武器を使うもんじゃないのかな」

と明久は^{つぶや}呟く。

そう——少女達は使っている武器が異なっていた。明久から見て右側の少女は、長剣状の武器を両手で構えている。

左側の少女は、やや短めの剣ながら——左右の手一本ずつの、計二本^{えもん}が得物だ。

独特なのは、それぞれの武器が、翠色^{みどりいろ}に淡く^{あわ}光っている事だ。

実を言えば、彼女等の武器は共に実体ではない。

訓練場を覆う^{フィールド}力場によって構成されているもので、本来は目に見える事すら無いらしい。さすがにそれでは扱いにくいので、敢えて立体映像を重ねるよう

にしてその形を可視化^{かし}しているのだとか。

彼女等の衣装が薄いのも、肉体保護としての機能は、この力場に任せる形になっているからだ。どれだけ激しく投げられようが、斬り付けられようが、殴られようが、全て力場が威力の何割かを相殺し、怪我をしない程度に減衰されるよう、設定されている。当たったかどうかの確認の意味もあつて、軽い痛みは感じる様になっているらしいが。

また——彼女等の動きは力場を管理する装置が逐次監視^{じかんし}しており、武器を操る際の負荷を掛ける役割をも担っている。前述の通り、武器には実体が無いので、そのままでは重さを感じる事すら無いが——それでは実際に武器を扱う感覚に慣れる事が出来ない。

要は完全に『仮想』の武器でありながら、その使用感^{きようかん}は実物を振るうのと大差無い。

長剣ならば長剣の、双剣ならば双剣の使用感が再現される訳で——当然、その戦い方はまるで違うも

のになる。

「得手不得手が当然にありますから」

と言ってくるのは明久の右隣に座っている少女だった。

緩やかに波打ち、豪華な印象を持った亜麻色の髪が特徴的だ。全体的に気品に満ちた雰囲気——隙無く整ったその容姿は、近寄る事すら躊躇われないような美しさだが、ただ一点、目許についた泣きぼくろが、彼女の雰囲気を優しく緩めていた。

明久を見つめる瞳は——紺碧。

だがこれが時に真逆ともいえるべき真紅に染まる事があるのを、明久は知っていた。

その耳もまた、二一世紀には存在しなかった、まるで悪魔か妖精のような尖り耳の形をしている。

「ベルレッタ——」

ベルレッタ・1394・ヴァンピール。

この機動要塞都市〈アーク〉の住人であり明久の護衛兼世話役である。

「特に私達は、能力の個人差が大きいですし」

「あ……そうか」

明久は納得して頷く。

西暦五〇一二年。

人類は過酷な環境を生き抜く為に、自らの遺伝子に手を加えてきた。その結果として人類は様々な姿形に分化する事となり、尖り耳のみならず、かつての人類には存在しなかった髪の色をした者や、獣のような耳と尾を備える者、その他、明久の時代から見れば異形とも言うべき形質を獲得していた。

それは単に姿形の差というだけでなく、能力面にも大きな個人差をつける事になっていて……当然ながら、戦闘においてもその違いは如実に出る。

「身体能力も、特能も、個人差が非常に大きいのですから。各個人の個性に合った武器というものを用いなければ、むしろ効率が悪いのです」

そう言っただけベルレッタが指さすのは、闘う少女達の——背中だった。

いや。正確にはその尻の部分。

そこにはまるで獣のような——毛に覆われた尻尾が生えていた。

「ミスズもルカも半獣系因子の発現者ですが、尻尾の長さや太さは微妙に違いますから。尻尾を持つ者はこれを姿勢安定器として使う事が多いですが、飛び跳ねる際の姿勢制御に使う者もいれば、大型武器を振り回す時の反動相殺に使う者もいますし。その辺はやはり様々です」

「なるほど……」

言われてみれば、確かに——武器の生産効率や訓練体系を考えないならば、各個人の身体や能力特性に従って別の武器を用意した方が、最終的に得られる力は大きくなるのだろう。

そしてこれは武道の修練ではない。

身も蓋もない、生き残りの為の技術を磨く訓練だ。だから——

「——ッ！」

「~~~~ッ！」

再び進む少女達の気合。

先程から見ていると、長剣の少女はどちらかというど猪突猛進、といった感じで、愚直な——外連味の無い真っ直ぐな攻撃を、何度も繰り返している。駆け込む勢いを利用した、見るからに一撃必殺戦法——恐らく当たれば相当な威力なのだろうが、それだけに予測し易いのか、相手は難なくこれをおかわし続けていた。

対して双剣の少女は、とにかく手数が多い。

まるで中国拳法のような軽い動きで右に左にと相手を翻弄し、様々な角度から攻撃を繰り返している。しかし見た目通りに一撃がそれぞれ軽い為か、長剣の少女には、その悉くがあつさりと弾かれていた。

剣が打ち合う度に、火花の代わりに緑色の立体映像が閃くように明度を増し、どこか幻想的な雰囲気醸し出す。二人の動きの素早さもあって、明久の眼には、それは、息の合った舞踊のようにすら見え

た。

良い勝負だ。

少なくとも、ここまでは。

しかし……

「なかなかやりますね！」

何度かの打ち合いの後——双剣の少女が後方に跳躍し、距離をとってそう言った。

「それでこそミスズ・4506・アンウエルフ、我が好敵手！ ですがこの私、ルカ・1608・ヴォルガルフの変幻自在な剣捌き、貴女の突撃一辺倒な剣法で破れるものではありません！」

御丁寧（ごていねい）に色々（いろいろ）と解説（かいせつ）している少女の名前はルカという。

長い青みを帯びた暗色の髪とすつきりとした目鼻立ちが印象的な——美人である。

黙って立っていれば楚々たる風情のお嬢様という風にも見えるが、その立ち居振る舞いは、おっとりしたベルレッタと真逆——やたらに気の強さが滲

んでいる。

（まあ悪い子じゃないんだろうけどな）

明久はそんな風に思う。

挑発的な言動は多いが、相手を蔑み貶めるような物言いをルカがしているのは、聞いた事が無い。とにかく勝負好きというか——常に誰かと競い合っていないと落ち着かないとか、そんな性格なのかもしれない。なかつた。

彼女もまた明久の同級生だ。ただしベルレッタ他二名の身辺警護役と異なり、彼女は明久の素性を——彼が、永い永い眠りによつて二一世紀から時を越えてやってきた『原種人類』であるという事を、知らない。

「……………」

ルカの挑発的な発言に対し——ミスズは唇を噛んで無言を維持している。

こちらも綺麗な少女だ。

目鼻立ちがくつきりとしており、鳶色の瞳を中心

に凜然^{りんぜん}とした——一切の媚^こびを含まず、むしろ迂闊^{うかつ}に触れれば斬る、と言わんばかりの研ぎ澄まされた刃物^{はもの}のような印象だ。

良くも悪くも堅物^{かたがた}、という印象である。

髪は赤みを帯びた暗色。

獣耳や尻尾、気の強そうな表情もルカと同じなのだが、こちらはとにかく生真面目^{きまじめ}というか——より強く張り詰めている感じがした。

ミスズ・4506・アンウェルフ。

彼女も明久の身辺警護役の一人だ。

「さあ——いい機会です」

ルカはやや大仰^{おおぎよう}な仕草で双剣を構えて言った。

「アキヒサさんの前で、どちらがより優秀かを示しましょう！」

「——って」

ぴくりと表情を震^{ふる}わせてミスズが口を開いた。

「なんでアキヒサの名前が出てくるのよ！」

「そこにいるからですけど？」

何を今更、といった口調でルカが言った。

「アキヒサは関係ないでしょ！」

「大ありですよ」

ふとルカが笑みを深めて言った。

「貴女は『転校生』のアキヒサさんの案内役、世話役を自認しているようですけれど。より優秀な者がその役を務めた方が、誰にとっても良い事ではありませんか？」

次の瞬間、ルカは素早い踏み込みで間合いを縮める。双剣が右から、左から、わずかな時間差を置いて襲^{おそ}い掛かった。

「くっ——」

小刻^{こきざ}みに長剣を動かしてルカの打ち込みを防ぐミスズ。

攻撃の手を緩めず、ルカは更にこう続けた。

「そうだ。ミスズ。一つ賭^{かけ}をしませんか？」

「……賭？ 何を賭けるっていうの？」

剣戟^{けんげき}の響^{ひび}きの合間に二人の会話が聞こえてくる。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。